

東京バッハ合唱団 月報

[第 677 号] 2018 年 11 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.677

November 2018

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

新・刊・紹・介

宮田光雄著『ルターはヒトラーの先駆者だったか』宗教改革論集 宗教改革とは何だったのか、問題解明の貴重な書

森井 眞 (団友)

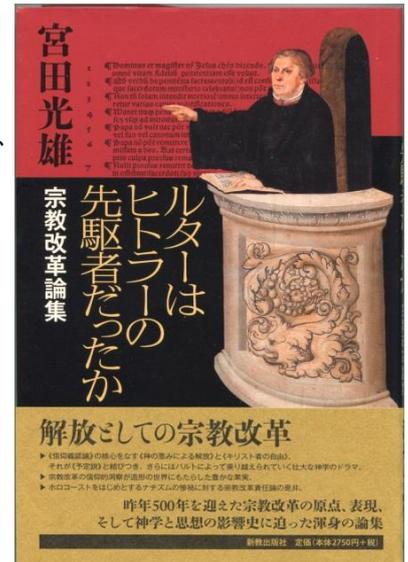
宗教改革の歴史を、これほど奥深く、緻密に、正確に、興味深く描いた本を、私はほかには知らない。宗教改革史が、政治・経済・社会・宗教の面に限らず、人間の歴史としてじつにみごとに描かれている。

宗教改革はルターが 1517 年 10 月 31 日、ヴィッテンベルクの城館付属教会の扉に「九十五箇条の論題」を提示したときに始まる、とされるが、2017 年はその 500 年目。本書はそれを記念して書かれた。そしてルターについて、彼が福音主義的な回心に導かれるまでの苦闘の歩みがじつに丁寧にとどめていられる。興味深いのは、「美術史の中の宗教改革」という章を設けて、ルターの肖像画について、それを描いたルーカス・クラナハ、アルブレヒト・デューラー、ピーテル・ブリューゲル等の仕事が詳しく書かれ、美術の面からも宗教改革が考えられるようになっていること。その上で「宗教改革の精神と神学」の章でルターとカルヴァンとを本格的に取り上げ、ルターの奴隷意志論とカルヴァンの予定説が説かれ、福音的信仰の発見、聖書原理の発見が書かれ、さらに「宗教改革者たちを越えて」と題してカール・バルトの予定信仰が語られる。終章が「ルターはヒトラーの先駆者だったか」で、ルターもユダヤ人文書でユダヤ人（反キリスト教徒）排斥を称え、力強いゲルマン主義、ドイツの内面性を主張した点でヒトラーの先駆者だとも言われること。しかしむしろルターと、実際に多くのユダヤ人を殺害したヒトラーとは全く異なるのが明らかだと、ルターの敬虔なことばをひいて説明する。

付論として「エキュメニズムはどこに向かうのか」で、カトリックとプロテスタントの対立を取り上げ、プロテスタントは宗教改革の信仰的遺産を正しく継承しながら、対話を通して互いの相違を認め合いつつ和解の道を歩むべきだ、と説いている。

宗教改革とは何だったのか。それにはまずルターのことを考えねばならないが、本書はそのルターについてじつに詳しく正確に、問題を解明しており、多宗教の現代社会に生きる私たちがいかに在るべきかを考えさせる貴重な書だと思う。

(新教出版社・2018 年 9 月 1 日刊・本体 2750 円)



【本書の著者・宮田光雄氏、当紹介文の筆者・森井眞氏は、ともに当合唱団の団友です。宮田氏は東北大学名誉教授、政治学・政治思想史のご専攻、森井氏はフランス宗教改革史がご専門で明治学院大学学長を 3 期お勤めになりました。

森井眞先生は、合唱団草創時代の旧団員で、去る 10 月 14 日に満 99 歳を迎えられました。これを記念して、合唱団関係者、明治学院大学教員時代の同僚・生徒、都立富士高校での教え子、今も共同代表をお務めになる「戦争を許さない市民の会」の賛同人の方々など、各グループ有志合同の「森井先生の白寿をお祝いする会」が先日開かれました（10 月 11 日、アルカディア市ヶ谷。参加者のお一人・八木誠一様のスピーチを次ページに掲載）。会の劈頭、先生は合唱団での思い出などを織り込みながら、よく通る元気な声でご挨拶をなさいました。

著者・宮田光雄先生は、団の活動にたえずお励ましをくださいますが、この春にも、本書刊行の予定に触れてお便りをお寄せいただきました（月報 671 号「おたより」欄）。発行日直前にご贈呈いただいた本書を、『ジャン・カルヴァン——ある運命』（教文館・2005 年）の著者である森井眞先生にご紹介いただくことが叶い、光栄に存じます。全地上の混迷の中に置かれたわれわれにとって、ご両所のご活躍は、まさに希望のともし火です。お二方のますますのご健勝とご長寿を、心よりお祈りいたします。編集部】

月報 11 月号 CONTENTS

- ・外柔内剛の森井さん—白寿の会スピーチ（八木誠一）…p.2
- ・コンサート「天使と羊飼いのクリスマス」（大村健二）…p.3
- ・第 118 回定演予告（2019 年 5 月 18 日）…p.4
- ・学びも遊びも全力、6 つの〈C〉（大村恵美子）…p.4

森井先生の白寿をお祝いする会スピーチ

(2018. 10. 11、於・アルカディア市ヶ谷)

外柔内剛の森井さん

八木 誠一 (団友)

もう 50 年以上も前のことです。私は横浜の関東学院大学神学部の講師で新約聖書学を担当していました。そのころ森井さんが教会史担当で着任されることになって、私は森井さんのことは聞き及んでいましたから、嬉しかったのです。初めてお会いしたときのことははっきり覚えています。教授会があって森井さんが初めて出席される日でした。神学部の——学部というとコンクリート建て、5、6 階の建物を想像されるかもしれませんが、チャペルに続く木造 2 階建て、部屋は 10 ほどもありましたか——階段を降りていたら下からあがってくる人がいるのです。森井さんらしいなと思って声をかけたら「そうです」ということで、それから親しくしていただきました。ところが森井さんはやがて神学部を辞めてしまわれたのです。そのころ森井さんは、私も関係していた日本キリスト教学会にも入っておられましたが、それも辞めてしまわれて、残念でしたが、それより悲しかったですね。森井さんは見切りが早くて上手なのでしょう。実際、関東学院大学神学部は 70 年代の学園紛争で廃部になってしまいました。そのときは、私も東京工業大学に移っていましたが、それは批判的新約聖書学が嫌われたからでした。

森井さんをご承知のように、また先ほどのお話からも分かるように、良識の人で、専門分野を超えて市民として良識ある人ですね。そして妥協なさない。もう少し妥協してもいいんじゃないかと思うけれど、良識人で妥協がないから信頼できるんです。関東学院を辞めてからも親しくしていただいて、桜上水のお宅にはよくお邪魔しました。家族ぐるみで千葉県に遊びに行き、まだ幼かった私の息子をつれて朝、海岸を歩き、珍しい貝殻をひろったこともあります。そうこうしているうちに森井さんは明治学院大学の学長になられ、ご多忙なので個人的な付き合いは減ってしまい、そのまま年賀状の交換ぐらいになりましたが、どうしておられるかいつも気になっていました。バッハ合唱団の月報や名簿にはお名前がありましたから全く知らなかったわけではないのですが、こんなことを申し上げては失礼ですけど、ご高齢の方の安否を尋ねるのは、ちょっと怖いじゃないですか。そうしているうちに、今回の森井先生白寿祝賀会のご案内をいただいたわけです。

私ごとで申し訳ないのですが、私の仕事には 3 つの中心があります。1 つ目は、新約聖書は何を語っているかということです。伝統的キリスト教の教義は、神の言葉である新約聖書に基づいているから疑わずに信じなさい、ということになっていますが、正確に読ん

でみると、教義は実は新約聖書の一部、一面に基づいているにすぎず、新約聖書が伝える中心事はそれとはかなり違ったものなのです。まさに現代にとって本当に必要なことを、当時の言葉で語っているのです。それを現代の人間に分かる言葉で語ったらどうなるかというのが、私の仕事の第 2 の中心で、それから新約聖書が伝える人間のあり方に触れるためにはどうしたらよいか、という第 3 の問題があり、やっと見当がついたので本に書きました。間もなく出る予定です。

さてこれで私の仕事は終わりだ。やるだけのことはやった。ただし伝統的キリスト教批判を含んでいるから——森井さんは私の仕事にいつも理解を示してくださいましたが——解ってくれる人はごく僅かだし、もうこんな世に生きていたくもないし、なるべく苦しまないで、人様に迷惑もかけないで、また見苦しくない仕方では消える道はないかと、ある程度本気で考えていたんです。そうしたら祝賀会のご案内がきて、ああやっぱり森井さんは偉いや、僕みたいに 90 にもならないのに——いま 86 歳です——泣き言を並べるようなことはしない。さきほどのお話しにもありましたように、人格は尊厳なもの、だれでも自由に生きることをあくまで大切にしなければならぬと、ご信念を地でいって、白寿まで頑張ってこられた。感心したし、おおいに反省もしましたね。

今日はお祝いとともに、身をもって励ましてくださったお礼に参りました。森井さんにはまだまだ頑張っていたいだきたいと思えます。ご清聴ありがとうございました。

後記：編集部の要請により、上記 3 点につき、近著をあげさせていただきます。『〈はたらく神〉の神学』（岩波書店、2012）、『回心 イエスがみつけた泉へ』（ぷねうま舎、2016）、『創造的空への道』（ぷねうま舎、2018）。



右：ロッソナー「合掌する聖母」
(1445 頃)、左：その部分

第 117 回定期演奏会へのお誘い

天使と羊飼いのクリスマス

《クリスマス・オラトリオ》第Ⅱ部を中心に

大村 健二 (団員)

[日時/会場]

12月22日(土)

A) 午後2時開演・荻窪教会

B) 午後6時30分開演・三崎町教会

[曲目]

- ・カンタータ第28番《頌むべきかな 年終り》
- ・《クリスマス・オラトリオ》より
第Ⅱ部「この地に野宿して 夜」
第Ⅲ部「あまつ君よ 聞きたまえこの響きを」(抜粋)

[入場無料] 詳細は右囲みを参照

左ページに掲げた絵は、9月の体験ワークショップから年末の2教会でのクリスマス・コンサートの案内チラシまで、ずっと使いまわしてきましたので、もうお馴染みになったことでしょう。15世紀ドイツの画家シュテファン・ロツホナーの「合掌する聖母(御子イエスの礼拝)」(1445頃)です。ミュンヘンのアルテピナコテーク(国立「旧絵画館」)にある37.5×23.6cmの板絵で、かつて移動の途中、大急ぎで立ち寄った際にショップで買った画集を、いま眺めています。

聖母マリアが絵の中心を占めるのは、15世紀中葉のドイツという事情を考えれば納得がいくことなのでしょうが、それにしても「神の御子」が画面の隅の土の上にごろんと転がっているのには、なんとも可笑しさがこみあげてきます。そのほかにも、細部をみると、つぎつぎに興味をそそられます。屋根の梁の上の天使たちが手にした巻物は楽譜でしょうか。今回の《クリスマス・オラトリオ》では、第21曲の合唱〈栄えあれみ神に〉に当たる箇所(ルカ2;14)「いと高きところには栄光、神にあれ。地には平和、御心に適う人にあれ」を、彼らは歌っています。

聖母マリアの背後、画面の左側は、羊の群れの番を

【後援会・団員の皆さま】

- 第117回定期演奏会は、右記のとおり、都内2つの会場でのクリスマス教会コンサートとなります。
- 両会場とも席数に限りがあり、また「入場無料」といたしますので、心苦しい限りですが、今回もまた、後援会員の皆さま全員に「招待状」をお出しすることができません。
- お手数ですが、右掲「予約のお申し込み」欄の要領にて、お名前をご登録いただければ、安心してご来場いただけます。当日の受付にてお名乗りいただき、ご入場ください(招待券・整理券は発行いたしません)。

する羊飼いたちに、天使が「大きな喜び」を伝えた場面です。「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである」と(ルカ2;10-11)。羊の群れの彼方、柱に隠れんばかりのあたりに、とおくエルサレムの宮殿らしき尖塔が描かれています(部分参照)、キリスト教徒はこの構図の意味を、大きな喜びのメッセージが最初に知らされたのは、王宮や都市の豊かな人びとにではなく、夜の荒野の羊飼いたち(当時の蔑まれた職業の人びと)だった、という真理として教わります。とても分かりやすい絵解きになっているようです。クリスマスの物語を、視覚的に豊かに肉付けながら、音楽のシーンに入っていきます。

今回の公演は、キリスト生誕劇の、この小さな一コマに焦点を当てました。また、これまでの月報でも何度が触れましたが、当初の予定を急きょ変更して、楽曲・編成ともに縮約された規模での教会コンサートとなりました。独唱部分も合唱団員が斉唱で担います。

第 117 回定期演奏会

“天使と羊飼いのクリスマス”

—《クリスマス・オラトリオ》第Ⅱ部を中心に—

- ◆日時と会場：2018年12月22日(土)【二部公演】
A) 午後2時開演、日本キリスト教団・荻窪教会
B) 午後6時30分開演、同・三崎町教会(水道橋)
- ◆曲目：J.S.バッハ(日本語上演・大村恵美子訳詞)
・カンタータ第28番《頌むべきかな 年終り》
Gottlob! nun geht das Jahr Ende BWV 28
・《クリスマス・オラトリオ》より
Weihnachts-Oratorium BWV 248/II +
第Ⅱ部「この地に野宿して 夜」(全曲)
第Ⅲ部「あまつ君よ 聞きたまえこの響きを」(抜粋)
- ◆演奏：
Fl 山田恵美子、Ob 土屋愛菜、Vn 中川典子
KB 菅原 光、Org 田尻明葉
合唱/斉唱 東京バッハ合唱団、指揮 大村恵美子

【入場無料】

- 両会場とも定員となり次第、入場を締め切らせて頂きますので、予めご了承ください。定員は、ご予約を含め、A) 先着100名、B) 先着250名です。なお、とくにA) 会場では混雑が予想されますので、お席の確保にはご予約をお勧めします。

【予約のお申し込み / お問い合わせ】

- 会場 A) / B) の別と、①お名前、②人数、③確認用メールアドレス / 電話番号、④ご住所を明記のうえ、
・メール (office@bachchor-tokyo.jp)
・はがき (156-0055 世田谷区船橋5-17-21-101)
・ファックス (03-3290-5732) ・電話 (03-3290-5731)
などにて、事務局あて、お願いします。

1. カンタータ第 28 番《頌むべきかな 年終り》BWV 28

1. アリア(S): 頌むべきかな 年終り 新たな年 迫りぬ
2. 合唱: 主を頌めまつれ み名 わが内に!
3. レチタティーヴォとアリオーソ(B): 主 言いたもう; われ喜びて かれらに恵みを授けん
4. レチタティーヴォ(T): 恵みは 泉とあふれ
5. 二重唱(A/T): 主は この年を 愛(め)でたまひぬ
6. コラール: み恵み讃えよ 天(あめ)なる父

全曲をとおして、古き年を導いてくださった神への感謝と、新たな年への恵みを祈ります。とくに第2曲の雄大な合唱フーガは、神が紡ぎつづける永遠の統治への信頼感に溢れています。今回は、罪過・災厄を過去へと押し流す除夜の鐘で年を越す、われわれの年末年始の感覚とのズレを楽しみながら歌ってみます。

2. 《クリスマス・オラトリオ》BWV 248 より

第Ⅱ部「この地に野宿して 夜」(全曲)

10. シンフォニア
11. 福音史家(T): この地に野宿して 夜
12. コラール: 清らのあけぼの 光を放て
13. 福音史家(T/S): み使いかれらに言う; おそるな 見よ
14. レチタティーヴォ(B): 神は アブラハムに むかし
15. アリア(T): 牧人らよ 行けやゆけ
16. レチタティーヴォ(S): みどり児は 布につつまれ
17. コラール: いぶせきうまやに 光満ちみちて
18. レチタティーヴォ(B): されば ゆけ 牧人よ
19. アリア(A): 眠れ いとしきみ子よ
20. 福音史家(T): たちまちみ使いらに 天の軍勢加わり
21. 合唱: 栄(は)えあれ み神に
22. レチタティーヴォ(B): この日 成し遂げられしことを
23. コラール: み使いととも に われら頌め歌わん

第Ⅲ部「あまつ君よ 聞きたまえこの響きを」(抜粋)

34. 福音史家(T): 牧人ら帰りぬ 頌め歌いつつ

学びも遊びも全力、6つの〈C〉

ノーベル医学生理学賞受賞の本庶佑氏のモットー

6つの〈C〉が時代を変える研究には必要だと、本庶佑氏(76歳)は説く。Curiosity(好奇心)/Courage(勇気)/Challenge(挑戦)/Confidence(確信)/Concentration(集中)/Continuation(継続)。後にともに京大医学部で教授となった中西重忠氏は、「彼はまさに『よく学び、よく遊んで』いた」、「大変なことでも本当に一生懸命やる。ノーベル賞をもらって当然」と評する。

7月1日の朝日新聞のこの記事を見て、合唱団員方に私がつねづね期待している心がけと、驚くほどマッチしているように感じて、この6つの〈C〉を、何かのために日々努力している人たちが、端的にわが身にもまとえるよう、取りあげ、常に思い究めながら歩みを重ねてほしいと思った。

各位がそれによって、眼をパッと見開くような経験を、味わっていただくことがあれば、と願っている。私自身も、老化に甘えることのないよう、良いモットーに気づかせていただけたことに感謝した次第。(大村恵美子)

<次回公演予告>

第 118 回定期演奏会

- ◆日時: 2019年5月18日(土) 午後2時開演
- ◆会場: 府中の森芸術劇場ウィーンホール
- ◆曲目: J.S.バッハ(日本語上演・大村恵美子訳詞)
 - ・カンタータ第109番《われは信ず わが主よ》
Ich glaube, lieber Herr, hilf meinem Unglauben BWV 109
 - ・カンタータ第166番《いずこへ 主よ 行きたもう》
Wo gehest du hin BWV 166
 - ・カンタータ第188番《わが堅き望み》
Ich habe meine Zuversicht BWV 188
 - ・カンタータ第79番《神は わが光 盾》
Gott der Herr ist Sonn und Schild BWV 79
- ◆演奏:
 - [ソプラノ] 光野孝子 [アルト] 谷地敏晶子
 - [テノール] 鏡貴之 [バス] 小藤洋平
 - [室内楽] 東京カンタータ室内管弦楽団
 - [オルガン] 新妻由加(当初予定の草間美也子さんから変更)
 - [指揮] 大村恵美子

入場券: 全自由席 3500円
(発売開始 2018年12月1日)

—参加団員募集—

練習開始: 2019年1月12日(土)
お問い合わせ: 事務局(本紙タイトル囲み内)

35. コラール: 喜べ み神は いまこそ
24. 合唱: あまつ君よ 聞きたまえ この響きを

先述のとおり、今回のオラトリオ上演は、羊飼いと天使の視点から「神の御子」の誕生の物語をお伝えしてみようとしています。

バッハとともにキリスト教徒は、降誕祭(12/25)から年の明けた顕現祭(1/6)までの12日間をクリスマスシーズンとして祝います。物語のなかでは、世界史との接点を示す皇帝アウグストへの言及(オラトリオ第Ⅰ部)や、生後8日目の神殿奉獻(バッハのオラトリオでは、この場面は割愛されました。たまたま成立・初演の年=1734年に、ここが指定箇所となる主日=降誕節後日曜日が訪れなかったからです。因みに、先の上演曲・カンタータ第28番が指定された日曜日がこれに当たりますが、歌詞との繋がりはありません)、イエスの割礼と命名(第Ⅳ部)、3博士の来訪(第Ⅴ部)、ヘロデ王を怖れてのエジプトへの逃避(第Ⅵ部)、などエピソードは盛りだくさんですので、すでに20回近いわれわれの上演歴のなかでも、羊飼いと天使に焦点、などという経験は初めてです。

キリスト教の文化にあまり馴染のない、われわれ一般の日本人にとっても、子どもごろのクリスマスカードなどで心に残るこの場面からならば、「大きな喜び」のメッセージを受信しやすいのではないのでしょうか。お楽しみいただければ幸いです。